C O N T E N T S

目次

1 第一章 家康の関東入国—中世末期から近世初頭の上野国
6 第二章 命名「高崎」—箕輪城から高崎城へ
12 第三章 高崎城を掘る
28 第四章 動く村—中世集落の解体、近世集落の成立
32 第五章 金箔瓦の城—沼田城、上田城
34 第六章 天下泰平—近世都市「高崎」の成立

付論

36 「城館にみる中世から近世」 斉藤慎一氏（江戸東京博物館）
45 「井伊直政段階ころの箕輪城」 秋本太郎氏（箕郷町教育委員会）
55 「高崎城の発掘」 大西雅広氏（群馬県埋蔵文化財調査事業団）
61 「真田氏時代の沼田城—西倉内遺跡の発掘調査」 小池雅典氏（沼田市教育委員会）
66 「近世初頭に街道・集落・城が動いた」 飯森康広氏（群馬県埋蔵文化財調査事業団）
77 出品資料一覧表
78 参考文献
79 協力者・協力機関 政後のひととき

プロローグ

いまから四〇七年前、「高崎」は誕生した。

秀吉が没した慶長三（一五九八）年、徳川家康の重臣井伊直政は、家康の命により、箕輪（現在の群馬県箕郷町）から和田（現在の高崎市）へ拠点を移した。現代都市「高崎」のルーツは、このときの城・城下町づくりにはじまる。

現在に残る、城絵図に記されたグランドデザインはいつできたのであろうか。

近年、各所で行われた発掘調査の成果から、何がわかるのだろう。

中世のおわり、戦国乱世の草刈場であった上野国（現在の群馬県）から、時空の扉をあけてみる。

鯱瓦（高崎市教育委員会所蔵）◎

第一章

徳川家康の関東入国

中世末期から近世初頭の上野国

長野氏—一揆の盟主

今から約六七〇年前、朝廷が南朝と北朝に分裂し対立した時代があった。南北朝時代という。両朝の争いは全国的な内乱状態へと展開し、当時の貴族や武士など支配者層のみならず、一般民衆まできまきこみ社会は変動した。内乱が終息に向かう十四世紀の終わりごろ、関東内陸部の群馬県は「上野国」と呼ばれていた。この時代、上野守護に山内上杉氏が就き、その守護代として惣社長尾氏や白井長尾氏が任じられていた。

永享一〇（一四三八）年、室町幕府六代将軍の足利義教・関東管領上杉憲実と、鎌倉公方足利持氏とが対立し、関東地方一帯が戦乱の場となる。これを「永享の乱」という。この乱は翌年二月まで続き、山内上杉氏の拠点であった上野国も巻き込まれていく。最終的に、幕府側の勝利となったこの抗争を期に、関東では鎌倉府の権威が失墜し、戦国時代へ移行する。

この時代、後に西上野の一大勢力に成長を遂げる長野氏は、在原業平を祖とし、平安時代に上野国の国衙役人として長野郷（高崎市浜川地域中心）に入り、後に土着した氏族である。榛名山南麓にあった長野郷を本拠として山内上杉氏の支配下にあり、上野国の国人一揆の盟主的地位となった。このとき、上野国地方にあった武将たちの間にも争いがおき、長野氏は十五世紀末に鷹留城（群馬郡榛名町）を築き、箕輪城もこの頃、築城された。築城時期について諸説あるが、西暦一五〇〇年前後に築かれたとする。

天文十（一五五〇）年、武蔵国で後北条氏と上杉氏との合戦がおきる。河越の戦いである。この合戦で上杉氏は北条氏康に敗れ、関東管領であった上杉憲政は、越後長尾氏をたより上野国から退去している。この争いは、後北条氏の関東制圧に欠かせない重要な出来事となる。この後、西上野国の武将は山内上杉氏にかわって長野業政のもと結集し、一大勢力となった。その一方で、相模国の後北条氏や甲斐武田氏らが上野国に侵攻し、永禄九（一五六六）年、武田氏により箕輪城が落城する。この後、西上野は武田氏の支配下に属していくが、その武田氏も天正十（一五八二）年、織田信長によって攻め滅ぼされ、信濃・上野国は織田氏の領地となる。

同年六月、本能寺の変で信長は明智光秀に殺され、上野国にはっていた信長重臣の滝川一益は、神流川の合戦（多野郡新町周辺）で後北条氏に敗れ、後北条氏の領地となる。箕輪城には氏康の三男氏邦が城主となり、西上野領国化の拠点としていた。しかし、後北条氏も天正一八（一五九〇）年、豊臣秀吉の小田原攻めにより滅亡し、徳川家康が関東へ入国してくる。